第二章　浮舟の物語　浮舟失踪と薫、匂宮

［第一段　薫、石山寺で浮舟失踪の報に接す］

　大将殿は、入道の宮の悩みたまひければ(大将殿は母君の入道宮が御病気だったので)、*石山に籠もりたまひて(石山寺に御籠もりになって)、騒ぎたまふころなりけり(平癒祈願を盛んになさっている時なのでした)。さて(その一方で)、*いとどかしこをおぼつかなう思しけれど(姫の引越しの日取りも近いので、薫大将はいっそう宇治の様子が気になっていらっしゃったが)、はかばかしう(早馬で)、「さなむ(こういう次第です)」と言ふ人はなかりければ(と姫の失踪を知らせる者がいなかったので)、かかるいみじきことにも(こういう大変な事態にあっても)、まづ御使のなきを(先に大将殿からの御連絡が無いのを)、人目も心憂しと思ふに(山荘の人たちの目から見ても情けなく思うが)、御荘の人なむ参りて(石山の大将殿の許にも遅ればせながら、宇治の荘園の者が遣いに参って)、「*しかしか(本日、姫君が俄かに病死なさり、この日の内に葬送されなさいました)」と申させければ(と取次女房に申させたので)、あさましき心地したまひて(殿は驚きなさって)、御使、そのまたの日、まだつとめて参りたり(殿の御使者がその翌日のまだ早朝に宇治山荘に参りました)。　*「石山」は滋賀県大津市の石山寺で、お寺のホームページには「JR 京都駅から石山駅まで新快速で 13 分」と誘い文句があるが、JR 石山駅からバスでまた 10 分かかるのは良いとしても、バスも電車も無い当時、今なら京滋バイパスが近そうでも石山 IC から宇治東 IC は丸々山道で、昔の道なら宇治からは京都までは出なくても山科から大津周りで石山へ向かったのだろうから、遣いは手間取ったことだろう。　*「いとどかしこをおぼつかなう思しけれど」は、姫の失踪の知らせを受けて「いとど」気になったのかとも思ったが、下に石山からは「まづ御使のなき」時点での文である事が分かるので、であれば、この「いとど」は＜引越しの日取りが近いから＞という理由になりそうだ。　*「しかしか」は、どの時点でのどういう知らせなのかが分かり難いが、下文の薫殿の御使の言葉として「昨夜のことは、などか、ここに消息して、日を延べてもさることはするものを、いと軽らかなるさまにて、急ぎせられにける」とあるので、姫の火葬(らしきもの)を見届けたらしい右近大夫などの遣い報告だったらしい。となると、姫の失踪は伏せられ、病死で火葬した、という報告内容になりそうだ。

　「いみじきことは(姫君の御病死という一大事は)、聞くままにみづからもすべきに(聞いて直ぐに私自身が参上申すべき事態だが)、かく悩みたまふ御ことにより(母宮が現に御病気なので)、慎みて(身を清めて)、かかる所に日を限りて籠もりたればなむ(こういう所に仏法に則った日数を決めて平癒祈願に籠もっておりますので、今は出向けません)。昨夜のことは(昨夜の葬送を急いだことは)、などか(何故)、ここに消息して(私に連絡を取った上で)、日を延べてもさることはするものを(日延べしてでも、然るべき葬儀を挙げるべきものを)、いと軽らかなるさまにて(そんな簡素に)、急ぎせられにける(執り行ったのですか)。とてもかくても(何れ御病死なら)、同じ言ふかひなさなれど(どういう葬儀をしても、どうせ生き返ることもない張り合いの無さだが)、とぢめのことをしも(最後の儀式の格式として)、*山賤の誹りをさへ負ふなむ(内舎人が言っているような地元の村人の非難を受けるようなことになったのは)、ここのためもからき(私にとっても辛い)」　*「やまがつのそしり」は注に＜『完訳』は「大夫・内舎人らの批判も薫の耳に入ったらしい」と注す。＞とある。が、遣いの報告自体が右近大夫

からの指示だったかと思われる。浮舟巻六章七段に「右近大夫といふ者を元として、よろづのことをおきて仰せられたるななり」とあり、右近大夫は宇治に居たようなので、大将に連絡をして来るのは、その右近大夫だろう。

など(と薫大将は)、かの睦ましき大蔵大輔してのたまへり(あの信頼厚い家司である大蔵大輔の仲信を使者に立てて仰いました)。御使の来たるにつけても(殿の使者が来たことにつけても)、いとどいみじきに(ますます右近と侍従は身につまされ)、聞こえむ方なきことどもなれば(何とも申し上げようの無いことなので)、ただ涙におぼほれたるばかりをかことにて(ただ涙が止まらないのは事実なので、それに託けて)、はかばかしうもいらへやらずなりぬ(詳しい事情説明もせず終いなのでした)。

[第二段　薫の後悔]

殿は(大将殿は)、なほ(帰参した仲信の報告にも)、いとあへなくいみじと聞きたまふにも(姫の病死を、まことにあっけない不幸とお聞きになるにつけても)、

「心憂かりける所かな(宇治は心憂し所だな)。鬼などや住むらむ(鬼でも住んでいるのか)。などて、今までさる所に据ゑたりつらむ(如何して姫を今まであんな所に置いていたんだろう)。思はずなる筋の紛れあるやうなりしも(どうやら二条院で、姫に思いがけない手出しが紛れてあったようなのに)、かく放ち置きたるに(あのような遠地に放って置いたので)、心やすくて(付け入る隙があって)、人も言ひ犯したまふなりけむかし(匂宮も姫に言い寄る罪を犯しなさることになったのだろう)」

と思ふにも(と思えば)、わが*たゆく世づかぬ心のみ悔しく(御自分の弛んだ世間知らずの考えが悔やまれて)、御胸痛くおぼえたまふ(自責の念を覚えなさいます)。悩ませたまふあたりに(母宮が療養なさっている石山で)、かかること思し乱るるもうたてあれば(こんなことを思い悩んでいらっしゃるのも不都合なので)、京におはしぬ(殿は京にお帰りになりました)。　*「たゆし」は「弛し」と漢字表記され＜だるい。緩い。たるんでいる。油断がある。＞ということらしい。

宮の御方にも渡りたまはず(殿は女宮の御部屋にも渡りなさらず)、

「ことことしきほどにもはべらねど(身分ある人ではないが)、ゆゆしきことを近う聞きつれば(不幸があったと身近に聞きましたので)、心の乱れはべるほども忌ま忌ましうて(気持が落ち着かない内は看病を控えようと、戻りました)」

など聞こえたまひて(と女宮には申しなさって、独り御部屋に籠もりなさって)、尽きせずはかなくいみじき世を嘆きたまふ(いつまでもはかなく辛い世の中を嘆きなさいます)。ありしさま容貌(姫の生前の姿が)、いと愛敬づき(とても愛らしく)、をかしかりしけはひなどの(情緒があった雰囲気が)、いみじく恋しく悲しければ(非常に恋しく悲しかったので)、

「うつつの世には(姫の生存中は)、などかくしも*思ひ晴れず(何故これほど深く思うことが出来ず)、のどかにて過ぐしけむ(悠長にしていたのだろう)。ただ今は(今となっては)、さらに思ひ静めむ方なきままに(一向に気が静まらず)、悔しきことの数知らず(悔やまれるばかりだ)。かかることの筋につけて(私はどうも女関係では)、いみじうものすべき宿世なりけり(辛い思いをする運命らしい)。さま異に心ざしたりし身の(普通の人とは違って仏道を求めたはずの身なのに)、思ひの外に(その思いとは違って)、かく例の人にてながらふるを(このように普通の男として恋に悩んで現世に長く留まっているのを)、仏などの憎しと見たまふにや(仏様が嫌っていらっしゃるからだろうか)。人の心を起こさせむとて(私に仏心を思い起こさせる為に)、仏のしたまふ*方便は(仏様がなさる試練は)、慈悲をも隠して(慈悲を見せずに)、かやうにこそはあなれ(このような辛い目に遭わせ為さるらしい)」　*「おもひはれず」は注に＜大島本は「思はれす」とある。『集成』『完本』は諸本に従って「思ひ入れず」と校訂する。『新大系』は底本のまま「思はれず」とする。＞とある。では、何故此処の本文は「思ひ晴れず」となっているのだろうか。また、訳文は＜夢中にならず＞とあるが、それは「思ひ入れず」に近い言い換えに見える。「思はれず」なら＜(深く)思う事ができず＞くらいなのではないか。　*「方便(はうべん)」は、別の目的の為に便宜上設けた目標を課す方法で、多くは分かり易い目標を掲げて少しづつ最終目標に近づく攻略法を指すが、此処では労苦を課すようで、そういうものはよく＜試練＞と言いそうだ。

と思ひ続けたまひつつ(と薫殿は思い続けなさって)、行ひをのみしたまふ(読経ばかり為さいます)。

[第三段　匂宮悲しみに籠もる]

かの宮はた(兵部卿宮の方は)、まして(大将以上に思い悩んで)、二、三日はものもおぼえたまはず(二、三日は呆然として)、うつし心もなきさまにて(正体も定まらず)、「いかなる御もののけならむ(何かに取り憑かれなさったか)」など騒ぐに(などと周囲が騒ぐので)、やうやう涙尽くしたまひて(ようやく涙も枯れなさって)、思し静まるにしもぞ(気持こそは落ち着きなさったが)、ありしさまは恋しういみじく思ひ出でられたまひける(姫の在りし様は恋しく辛く思い出されなさるのです)。人には(周囲の人には)、ただ御病の重きさまをのみ見せて(ただ御体調が悪いようにばかり思わせて)、「かくすぞろなる*いやめのけしき知らせじ(このように無性に泣ける女々しい姿は見せまい)」と、かしこくもて隠すと思しけれど(と、上手く恋煩いを隠した心算でいらっしゃったが)、おのづからいとしるかりければ(どうしてもその表情ははっきりと表に現れていたので)、　*「いやめ」は「嫌目・否目」と漢字表記があり＜悲しそうな目つき。涙目。＞と古語辞典にある。

「いかなることにかく思し惑ひ(どういうことでこのように思い悩みなさり)、御命も危ふきまで沈みたまふらむ(御命も危ぶまれるほど気落ち為さるのだろう)」

と(と宮の御様子を)、言ふ人もありければ(話している人もいたので)、かの殿にも(大将殿に於かれても)、いとよくこの御けしきを聞きたまふに(よくよくこの宮の御状態をお聞き

になって)、「さればよ(やはり姫の死を悲しんでいるようだ)。なほ、よその文通はしのみにはあらぬなりけり(けして、よそよそしい手紙の遣り取りだけではないようだ)。見たまひては(宮が姫とお会いになれば)、かならずさ思しぬべかりし人ぞかし(姫は宮が必ず相当に思い入れなさるに違いない人だ)。ながらへましかば(姫が生きていたとしたら)、ただなるよりぞ(ただならず)、わがためにをこなることも出で来なまし(私が裏切られることになっただろう)」と思すになむ(とお思いになると)、焦がるる胸もすこし冷むる心地したまひける(姫に恋焦がれて熱くなる胸も少し冷める気が為さいました)。

[第四段　薫、匂宮を訪問]

宮の御訪らひに(御不調でいらっしゃる兵部卿宮の御見舞に)、日々に参りたまはぬ人なく(連日参上なさらない高官も居らず)、世の騒ぎとなれるころ(世間で宮を心配申し出す頃に)、「ことことしき際ならぬ思ひに籠もりゐて(身分の低い者の不幸で謹慎して)、参らざらむもひがみたるべし(宮の御見舞に伺わないのも礼儀に欠けるだろう)」と思して参りたまふ(とお思いになって薫大将は二条院に参上なさいます)。

そのころ、*式部卿宮と聞こゆるも亡せたまひにければ(この時は式部卿宮と仰る宮もお亡くなりになっていたので)、*御叔父の服にて薄鈍なるも(大将殿は御叔父の服喪で薄ねず色の喪服姿だったのも)、心のうちにあはれに*思ひよそへられて(表向きは服喪出来ない姫の死を、内心では悼む事が出来たので)、つきづきしく見ゆ(好都合に思われました)。すこし面痩せて(大将殿は少し面痩せして)、いとどなまめかしきことまさりたまへり(いっそう優美さが増していらっしゃいました)。人びとまかり出でて(他の見舞客は帰っていて)、しめやかなる夕暮なり(静まった夕暮れでした)。　*「しきぶきゃうのみや」は注に＜蜻蛉式部卿宮、以前に娘を薫にと志したことがある宮（東屋)。＞とある。東屋巻二章一段には「右の大殿、按察使大納言、式部卿宮などの、いとねむごろにほのめかしたまひけれど、聞き過ぐして、帝の御かしづき女を得たまへる君」と語られていたが、詳しい系譜説明は無く、良く分からない人だ。ただ、この年で亡くなった年回りからすれば、故八宮の弟宮あたりになりそうではある。　*「おおんをぢのぶくにてうすにびなるも」は注に＜薫の叔父。軽服三ケ月の喪。＞とある。　*「思ひ寄そへられて」は注に＜叔父の服喪に浮舟を悼む。＞とある。

宮、臥し沈みてはなき御心地なれば(宮は寝込むほどの御病状ではないので)、疎き人にこそ会ひたまはね(疎遠な儀礼上の見舞客には面会なさらないが)、御簾の内にも例入りたまふ人には(御簾内に普段からお入りになる親しい人には)、対面したまはずもあらず(対面なさらないことはありません)。見えたまはむもあいなくつつまし(宮は大将にお会いになるにつけても、あいにくの事態なので気まずく気が引けます)。見たまふにつけても(実際にお会いになると)、いとど涙のまづせきがたさを思せど(姫のことが思い出されて、いっそう涙が止められない気がなさるが)、思ひ静めて(気分を落ち着けて)、

「おどろおどろしき心地にもはべらぬを(ひどく悪くはありませんが)、皆人(誰もが)、慎むべき病のさまなり(用心すべき病状だ)、とのみものすれば(とばかり言うので)、内裏にも

宮にも思し騒ぐがいと苦しく(父帝におかれても母宮におかれても御心配頂くのがとても心苦しく)、*げに(あなたがいつも仰るとおりに)、世の中の常なきをも(世の無常を)、心細く思ひはべる(心細く思っています)」　*「げに」は注に＜『完訳』は「現世の無常が薫の口癖。それに「げに」と納得しながら、浮舟の死を悼む気持も言外に出る趣」と注す。＞とある。

とのたまひて(と仰って)、おし拭ひ紛らはしたまふと思す涙の(袖で目頭を押さえて紛らしなさろうとなさる涙が)、やがてとどこほらずふり落つれば(そのまま拭えずにほろりとこぼれるので)、いとはしたなけれど(とても極まりが悪かったが)、「かならずしもいかでか心得む(必ずしもこの涙が姫を悼んでのものと、如何して大将に分かろうか)。ただめめしく心弱きとや見ゆらむ(ただ不調を嘆いて気弱になっていると思うだろう)」と思すも(と宮はお思いになるが)、「さりや(やはりそうか)。ただこのことをのみ思すなりけり(宮は正に姫の死を悲しんでいらっしゃるようだ)。いつよりなりけむ(二人の恋仲は、何時から続いていたのだろう)。我をいかにをかしと(私をどんなに鈍感だと)、もの笑ひしたまふ心地に(物笑いにしていらっしゃった気持で)、月ごろ思しわたりつらむ(何ヶ月も思って来たらしい)」

と思ふに(と思って)、この君は、*悲しさは忘れたまへるを(大将殿が姫を喪った悲しさを忘れていらっしゃる冷静な表情でいるのを)、　*「悲しさは忘れたまへるを」は＜悲しさは忘れていらっしゃるのを＞とだけ読んだのでは下文に繋がらない。下文は、この大将の表情を見た匂宮の印象が語られているので、此処では＜大将がそういう表情でいるのを(匂宮は見て)＞とまで言って置く。

「*こよなくも(大将はまたずいぶん)、おろかなるかな(姫が死んだというのに、薄情なものだ)。ものの切におぼゆる時は(本当に恋していれば)、*いとかからぬことにつけてだに(このような死別という事ではないにしても)、空飛ぶ鳥の鳴き渡るにも(空飛ぶ鳥の鳴き渡るのにも、つがいの呼び合う切なさに)、もよほされてこそ悲しけれ(涙が誘われて悲しくなるものだ)。わがかくすぞろに心弱きにつけても(私がこのよう無性に涙もろいのも)、もし心得たらむに(姫を喪ったからだという事情を、もし大将が知ったなら)、さ言ふばかり(いつも無常を口にするようには)、もののあはれも知らぬ人にもあらず(ものに動ぜずには居られないだろう)。世の中の常なきこと*惜しみて思へる人しもつれなき(世の無常という訓えを尊い教条と考える人などはつまらないものだ)」　*「こよなくもおろかなるかな」は注に＜以下「人しもつれなき」まで、匂宮の心中の思い。『完訳』は「薫はなんと薄情な人か。以下、冷静な薫を見ての匂宮の心中」と注す。＞とある。「おろか」は＜疎か→不熱心だ→薄情だ＞という語用らしく、文脈を追って、訳文を読めば、確かにそれらしい文意に見えるが、私には独力でこの文意が取れる気がしない。何とも語感が掴めない難文だ。これが、当時の現代語文の語調、ということなのだろうか。　*「いとかからぬこと」は注に＜人の死去ということ。＞とある。　*「をしむ」は多分、むしろ「愛しむ」で＜大事にする＞だ。で、問題はその対象が何かだ。で、その対象は「世の中の常なきこと」なのだが、この「こと」は＜世の無常それ自体のこと＞なのではなく、世が無常であるという＜事を説く教条＞だと見做せば、文意が取り易い。即ち、教条主義は詰まらない、というのが此処の文意だ。因みに、「つれなし」は＜冷淡だ。鈍感だ。＞という悪口の語感で、褒め言葉として＜冷静だ。沈着だ。＞という語用は無い、かと思う。この兵部卿の挑戦姿勢は、恐らくとても重要な物語構成要素だ。

と（と宮は）、*うらやましくも*心にくくも思さるるものから（その大将の気取った態度が小憎らしくも隙が無いようにも思えなさるものの）、*真木柱はあはれなり（すべての事は、薫殿が出家を旨に宇治の八宮の所に通い出したことから始まったのであり、いつも中心に薫殿が居た事を思えば感慨深い）。これに*向かひたらむさまも思しやるに（宮は、姫が大将の所に赴くことになった経緯を考えて御覧になると）、「形見ぞかし（姫は宇治姉君の形代ということか）」とも（と気付いて）、うちまもりたまふ（大将をじっと見詰めなさいます）。　*「うらやまし」は現代語では＜優れた相手を認めて、自分もそういう立場に近づきたい＞という意味で語用するが、古語では「やまし」の語感が強いようで＜自分の引け目が気になる→ねたましい＞という語用も多いらしく、此処でも宮は気取った大将が気に入らないのだろう。また、「やまし」には＜後ろめたい＞という語用もあり、宮は姫を横取りしたのだから、その事を引け目に思う、ということもありそうだが、宮には恋の鞘当を悪びれる様子は皆無だ。邪魔されるのを避けるためと、大将が囲っている女に手を出す分の悪さから、宮は蔭でこそこそと動いているが、宮にとって恋は勝負事であり、決して悪事ではないらしい。いや、多くの庶民にとっては、この手の手出しは、取り繕う実力がないので絶対に負けるし、その愚を犯すことは失うものが大き過ぎるので、実利上では殆んど悪と見做されそうだが。　*「心憎し」は、相手の用意周到さに敬服するという高評価の形容らしく、態度に付いて言うなら＜落ち着いていて隙が無い＞くらいだろうか。　*「真木柱はあはれなり」は注に＜『源氏釈』は「わぎもこが来ても寄り立つ真木柱そもむつましやゆかりと思へば」（出典未詳、源氏釈所引）を指摘。薫も浮舟ゆかりの人と思えば懐かしく思われる、の意。＞とある。真木柱は芯柱、大黒柱の美称だ。「真木柱は」は＜大将が真木柱であったことは＝いつも中心に大将が居たことは＞という言い方なのだろう。また、宮が言う「わぎもこ（吾妹子）」は、常陸姫のみならず対の御方のことでもありそうだ。だから、此処で改めていろいろ思い合わせると、常陸姫は大将にとって宇治姉姫の「かたみぞかし（人形だったのか）」と気付いて、宮は大将をじっと見つめた、ということらしい。まさか、今の今まで、宮はその事に全く気付かなかった、ということでもないんだろうが、姫が死んだ今、改めて考えてみると「あはれなり（感慨深い）」らしい。　*「むかふ」は、此処では＜向き合う＞ではなく＜赴く＞だろう。

［第五段　薫、匂宮と語り合う］

やうやう世の物語聞こえたまふに（いろいろ世間話を為さるうちに）、「いと籠めてしもはあらじ（姫のことに、全く触れずにはいられない）」と思して（と大将はお思いになって）、

「昔より、心に籠めて（以前から内心では気になっていて）しばしも聞こえさせぬこと残しはべる限りは（少しも申し上げないままでは）、いといぶせくのみ思ひたまへられしを（依然として疑問に思われますことがございますが）、今は、なかなか上臈になりにてはべり（今は私も思いがけず政府の重責に就いておりまして）、まして、御暇なき御ありさまにて（宮様は私以上にお忙しそうで）、心のどかにおはします折もはべらねば（ゆっくりなさっていて、私がお伺いできる時もございませんので）、宿直などに（御所の殿居の時などにお話ししたかったのですが）、そのこととなくてはえさぶらはず（特別な事情でもなければ、私は夜警当番にはお仕え申せず）、そこはかとなくて過ぐしはべるをなむ（折り入ってご相談も出来ずに今に至っております）。

昔、御覧ぜし山里に(昔、宮様も行って御覧になった宇治山荘に)、はかなくて亡せはべりにし人の(はかなく亡くなった姉君の)、同じゆかりなる人(同じ血縁にある八宮の血を引く人が)、おぼえぬ所にはべりと聞きつけはべりて(知らない所に居ると聞きつけまして)、時々さて見つべくや(時々故君の形代として慰め見たい)、と思ひたまへしに(と思い申したのですが)、あいなく人の誹りもはべりぬべかりし折なりしかば(その時が丁度、女二の宮をお迎え申す時で、その女を迎え入れるのは、世の誹りも受けそうだったので)、このあやしき所に置きてはべりしを(その遠い山里に置いておりまして)、をさをさまかりて見ることもなく(頻繁に出向いて会うことも無く)、また、かれも(また、その女の方でも)、なにがし一人をあひ頼む心もことに*なくてやありけむ(私一人を頼る気持も特に無くても良いのだろう)、とは見たまひつれど(とは思っていなさったが)、*やむごとなくものものしき筋に思ひたまへばこそあらめ(正妻待遇すべきと思う身分の女ならともかく)、見るにはた(生活の面倒を見る分には特に)、ことなる咎もはべらずなどして(そのように山住みさせて置いても、取り立てて非難される筋合いも無いと)、*心やすくらうたしと*思ひたまへつる人の(気軽に可愛がろうと思っておりました程度の身分の女が)、いとはかなくて亡くなりはべりにける(急に亡くなりましてございます)。なべて世のありさまを思ひたまへ続けはべるに(いろんな生前の姿を思い出し申しますと)、悲しくなむ(哀れです)。聞こし召すやうもはべらむかし(この事はお聞き及びかも知れませんが)」　*「なくてやありけむ」は＜無しに居たのだろうか＞という客観表現だろうか。あるいは＜無くても良いだろう＞という判断表明だろうか。この文意を取る鍵は、実は「見たまひつる」の主語が大将ではなく常陸姫であることから、姫が自身を客観表現することはないので、姫の判断表示だと分かる。つまり、「見たまひつる」の「たまふ」は四段活用で、話者の謙譲語ではなく、話者の動作主体に対する尊敬ないし丁寧表現だ、ということに注意しなければならない、ワケだ。で、この姫に対する他人行儀な言い方が、宮が期待する大将の落胆の、存外の軽さを示そうとした言い方になっている、のだろう。　*「やむごとなく～」は、出し抜いた心算で優越感に浸っているであろう宮への、大将の牽制。　*「心やすくらうたし」は、姫を夢中にさせるほど情熱的だったらしい宮への、大将の強烈な皮肉。　*「思ひたまへつる」の「たまふ」は下二段活用の謙譲語で、上の「見たまひつる」と対比し易い。

とて、今ぞ泣きたまふ(と言って、大将は此処でお泣きになります)。

これも(薫君にしても)、「いとかうは見えたてまつらじ(宮に無様な姿は見せまい)。をこなり(如何にも女を寝取られた男のようで、みっともない)」と思ひつれど(と思っていたが)、こぼれそめてはいと止めがたし(一旦涙がこぼれ出すと止められません)。けしきのいささか乱り顔なるを(そのように、自分一人を頼って居たでもないと言うくせに、その死を悼んで大泣きする大将の様子がいささか複雑な表情なのを)、「*あやしく(変だ)、いとほし(何か知っているのか)」と思せど(と宮はお思いになったが)、*つれなくて(平静を装って)、　*「あやしくいとほし」は注に＜『集成』は「浮舟との秘事を知られたか、とようやくこのあたりで気づく体」と注す。＞とある。曖昧表現なので、字句自体の語意よりは文脈や場の流れで文意を取るしかなさそうで、そう言われればそうなのかも知れない、と思うくらいの分かり難い言い方だ。で、此処をそのように解するには、むしろ上の「けしきのいささか乱り顔なるを」に相当な補語を施す必要があるように私には思える。　*「つれな

し」は＜冷淡だ＞の他に＜動じない。無関心だ。平然としている。＞という語用もあるが、宮は動じないのではなく、動じない振りをしているので、この「つれなくて」は「つれなし作りをして」の略と見做して置く。

「いとあはれなることにこそ(とてもお気の毒なことで)。昨日ほのかに聞きはべりき(昨日ちらっと聞きました)。いかにとも聞こゆべく思ひはべりながら(何かしらお悔やみ申したいと思い申しながら)、わざと人に聞かせたまはぬこと(その人のことは、あなたがあまり人にお聞かせになっていない)、と聞きはべりしかばなむ(と聞きましたので、遠慮申していました)」

と、つれなくのたまへど(と白々しく仰ったが)、いと堪へがたければ(宮は姫を思えば、涙を抑え難かったので)、言少なにておはします(言葉少なでいらっしゃいます)。

「*さる方にても御覧ぜさせばや(あなたの然るべき相手としてお目に掛けたい)、と思ひたまへりし人になむ(と思っていた人なのでした)。おのづからさもやはべりけむ(もうあなたはそのような相手として、ご存知の人だったのかもしれません)、宮にも参り通ふべきゆゑはべりしかば(二条院にも出入り申すような対の御方に御縁のある人でしたので)」　*「さる方にても」は注に＜『完訳』は「あなたのしかるべき相手として。匂宮の愛人として紹介したかったとする。匂宮への痛烈な皮肉」と注す。＞とある。「然る方」は＜然るべき適当な人＞という一般語用であるとともに、具体的に＜あなたがそのように処遇した人＞という意味合いも掛けた言い方だ。一般語用としてだけの言い方なら、それなりに通じるにしても、あまりにも唐突な言い出しだ。姫と愛人関係にあった相手だからこそ、急所を突いた、相手の前言を受けた応答として成立するもので、白を切る宮にカマを掛けていることになる。ここで宮が重ねて白を切るには、「さあ、私には心当たりがないが」と言わなければならない。それは、今まで曖昧に言い逃れていたよりは、ひとつ具体的な偽りを言うことになるわけで、如何でも良い事柄なら破綻しない筋書きを理屈で考えれば良いだけだが、気持ちがある事柄だと、嘘を吐くのは自分の真心を否定するので辛い。そういう意味で、大将は宮に攻勢を掛けた、のだろう

など、すこしづつけしきばみて(などと大将は少しづつ核心に迫って)、

「御心地例ならぬほどは(お加減の悪い時は)、*すぞろなる世のこと聞こし召し入れ、御耳おどろくも、あいなきことになむ(つまらぬ世間話をお耳にあそばし、お心を騒がせられますのもよろしくないことですございます)。よく慎ませおはしませ(御安静に為さってください)」　*「すぞろなる世のこと」は注に＜大島本は「すそろなる」とある。『集成』『完本』は諸本に従って「すずろなる」と校訂する。『新大系』は底本のまま「すぞろなる」とする。『集成』は「つまらぬ世間話をお耳にあそばし、お心を騒がせられますのもよろしくないことですございます。暗に、浮舟の死をそう嘆かれますな、と言い、それゆえの病と察していることを仄めかす」と注す。＞とある。この遣り取りで宮は、大将が自分と姫との仲を、何処まで詳しくかはともかくも、知っている、ということは分かっただろう。そして宮は、姫が大将が決めた引越と自分が誘った隠れ家との板ばさみで進退窮まって入水したらしい、という事情も時方から知らされていただろうが、大将は姫の死を、少なくも仲信の報告からは病死と聞かされていた、というのがこの時点での、それぞれの認識事情であったらしい。

など、聞こえ置きて、出でたまひぬ(と申し置いて、お帰りになりました)。

[第六段　人は非情の者に非ず]

「いみじくも思したりつるかな(宮は姫の死を非常に深く嘆いていらっしゃるようだ)。いとはかなかりけれど(姫はまことにはかない一生だったが)、さすがに高き人の宿世なりけり(さすがに八宮の血を引く王家人の運勢だった)。*当時の帝、后の、さばかりかしづきたてまつりたまふ親王(兵部卿は今上の天皇と皇后が非常に大切にお思い申しあそばす皇子で)、顔容貌よりはじめて、ただ今の世にはたぐひおはせざめり(お顔立ちからして、今の世には他に無いだろうほどに優れていらっしゃり)、見たまふ人とても、なのめならず(結婚なさった御相手も立派で)、さまざまにつけて、限りなき人をおきて(その他にも色んな美女が侍るのを差し置いて)、これに御心を尽くし(この姫に御熱中し)、世の人立ち騒ぎて(このように宮中を挙げて)、修法、読経、祭、祓と、道々に騒ぐは(霊魂を鎮める呪いや仏頼みや神頼みや厄難除けと、それぞれの道師に平癒祈願させるのは)、この人を思すゆかりの(この常陸姫を愛する宿縁によってもたらされた)、御心地のあやまりにこそはありけれ(御容態の悪さであるのだから)。　*「当時の帝(たうじのみかど)」は＜当代の帝＝今上天皇＞をいう言い方で、「当時」は現代語では＜その当時＝過去のある時点＞を言うが、古語ではむしろ＜現在＞を言うらしい。

我も(私にしても)、かばかりの身にて(このような重役の身分で)、時の帝の御女を持ちたてまつりながら(今上帝の御息女を妻に迎え申し上げながら)、この人のらうたくおぼゆる方は(この姫を守りたい気持は)、劣りやはしつる(宮に劣りはしない)。まして(ましてその姫が)、今はとおぼゆるには(今は故人と思えば)、心をのどめむ方なくもあるかな(心の鎮めようもない)。さるは(しかし、それは)、をこなり(裏切られていたのだから、バカな話だ)、かからじ(もうこんなことに関わるのは避そう)」

と思ひ忍ぶれど(と薫殿は気持ちを抑えようとするが)、さまざまに思ひ乱れて(さまざまに心乱れて)、

「人、木石に非ざれば皆情けあり(人は情に流されるから、下手に美人と遇うと人生を過つ)」　*出典参照に「人非木石皆有情　不如不遇傾城色〈人木石に非ざれば皆情有り　傾城の色に遇はざるに如かず〉」(白氏文集巻四-一六〇　李夫人)と指摘がある。李夫人は漢の武帝に愛された美女で、「傾城色(けいせいしょく、国を傾けさせるほどの美人)」と言われたらしい。早世した為に、武帝はその死を悼んで嘆き、政務を顧みなかったとのこと。「不如(ふじょ)」は＜～に及ばない＞という中国語で、「不如不遇傾城色」は＜国を傾けるほどの美人には会わないほうが良い＞ということらしく、薫殿は常陸姫の早世を李夫人に準えて自嘲したのだろう。

と、うち誦じて臥したまへり(と古詩を呟いて横になりなさいました)。

*後のしたためなども、いとはかなくしてけるを(姫の葬送をごく質素にしてあるのを)、「宮にもいかが聞きたまふらむ(宮におかれても如何お思いだろうか)」と、いとほしくあへ

なく（と薫大将は情けなく張り合いがなく）、「*母のなほなほしくて（この姫の母が臆病で）、*兄弟あるはなど（異父兄弟が居る事情などで）、*さやうの人は言ふことあんなるを思ひて（姫の変死を迷惑がって誰かが非難することもあるかも知れないと）、こと削ぐなりけむかし（葬送を簡素にしたらしい）」など、心づきなく思す（などと薫大将は心外にお思いになります）。　*「のちのしたため」は＜後始末＞で、此処では＜姫の葬送＞のことらしい。　*「母のなほなほし」は注に＜以下「こと削ぐなりけむかし」まで、薫の想像。浮舟の母は八宮の女房中将の君、現在は受領の北の方という低い身分。＞とある。「なほなほし」は＜平凡だ。普通だ。品がない。卑しい。＞などと古語辞典にある。で、此処の薫殿の考察は、一章七段の右近と侍従による強引なまでの姫の簡素な葬送を「片へおはする人はことさらにかくなむ京の人はしたまふ」と言っていた田舎人たちの陰口を受けたもの、らしい。しかし、母親の連れ子とは言え、継父の前常陸守は実力があり、場合によってはその家格様式で儀式を執り行うことこそが、常陸守自身の政治的な立場を示すのであり、葬儀はその重要な舞台と成り得るものの一つだ。実際に、姫の相手は兵部卿と右大将だったのであり、姫が存命なら、どういう立場であったにせよ、何らかの形で常陸守が取り入る手づるには成り得ただろう。が、変死は確かに難しい問題を孕みそうだ。が、それでも、葬儀が全く母親一人だけの差配になるというのは、正に母君自身がこの姫を特別扱いしていた事の裏返しであると共に、それなりの資産はあったのだろうが、母親の独立性の強さを示しているし、それで通る社会慣習はあったらしいとは知れる。ただ、此処の「母のなほなほしくて」はあくまでもこの母君の個別独自な社会的立場を言うもので、一般的に＜なほなほしき母＞が如何いうものかを論じているわけではないだろう。だから、此処で言う「なほなほし」は＜身分の低さ＞ではなく、後ろ盾の無い後妻の＜我を張れずに平凡さを繕わなければならない立場＝失敗を恐れる臆病さ＞あたりを言っている、かと思う。　*「はらからあるはなど」は注に＜『完訳』は「兄弟のある人は葬儀を簡略にするとの風習」と注す。＞とある。が、「兄弟のある人は葬儀を簡略にするとの風習」という事自体が、何のことを言っているのか私には分からない。例えば、「兄弟のある人」に共通の条件を考えて、一般的に「兄弟のある人」の生活環境は一人っ子とは違う、というような特性指摘は出来るかも知れないが、葬儀の風習という社会様式に兄弟の在る無しが一般条件として作用するという様な事は、私の知る限り無い。せいぜい式次第の進行手順で考慮されるくらいだ。それに先ず本文に沿って文意をみれば、此処の「はらからあるは」は、実際にこの常陸姫にあっては＜異父兄弟が居るから＞という個別事情、を言っているのだろう。特に「あるは」の「は」は上記の事物に限定して以下に叙述するという条件項を示す係助詞なので、この構文に沿って＜なので、だから＞の論理文意を取らなければならない。また、此処の「など」の語用だが、是は婉曲表現の＜というようなこと（があって）＞という副助詞だろうが、此処の婉曲で伏せられた「というようなこと」を明示すれば＜彼等は姫の変死を悼むより迷惑がるかもしれないので＞ということだろう。そういう個別事情が有ってこそ、「こと削ぐなりけむかし」という結論に至る合理性がある。　*「さやうの人は言ふことあんなる」は「さやうの人」で＜そのような人＞と「兄弟」を言い換えているのではなく、是は「はらからあるはなど」の条件項を受ける構文なので、「さやうの」は「言ふこと」に掛かる＜簡素でも早く葬送を済ませる理由＝姫の変死を迷惑がる非難＞という言い方で、「人は」は兄弟の内の＜誰かが＞という言い方の挿入句構文なのだろう。ただし、右近と侍従が葬送を急いだのは、不都合な姫の失踪を、それよりはましな病死と偽る為のものだった。実際に遺体は無い。

おぼつかなさも限りなきを（はっきりしないことばかりなので）、ありけむさまもみづから聞かまほしと思せど（詳しい事情も自ら聞きたくお思いになるが）、*長籠もりしたまはむも便なし（宇治へ出向いて三十日間の忌籠もりを為さるのは立場上不都合です）。「行きと行き

て立ち帰らむも心苦し(かといって、行くだけ行って話だけ聞いて帰るのも冷淡に過ぎる)」など、思しわづらふ(と薫大将は思い悩みなさいます)。　*「長籠もりしたまはむも便なし」は注に＜宇治に行き三十日間の忌籠もりをするのは不都合と考える。＞とある。